

浦里明鳥の死闘

二八

山名屋の段

〔解題〕明和六年七月三日に、幕府御賄方伊藤伊左衛門の惣伊之助(廿一歳)と吉原京町二丁目薦屋抱へ三芳野と情死したのを材題として最初に淨るりに綴つたのは新内節の「明鳥夢泡雪」(本巻同項参照)であつた。これより浦里時次郎の名は名高くなつたと共に、新内特有の物のやうであつたが、嘉永四年二月市村座で「明鳥花濡衣」の外題で坂東しうかの浦里、八世團十郎の時次郎で清元太兵衛が淨るりを語つて大好評を博し、又同年三月大阪の大西芝居でも「明鳥夢泡雪」を興行して居る。(只誠翁の情死錄には弘化四年興行とあるが、大阪歌舞伎年鑑には見えて居ない)。かういふ大勢に刺戟されたものか、嘉永六年一月大阪新築地清水町濱の竹本綱太夫の

操芝居で、妹脊山の切として「明鳥雪の曙」と題して山名屋の段を出し、口を竹本田喜太夫、切を竹本咲太夫が語つてゐる。これが人形芝居の明鳥の始めらしい。越えて翌安政元年四月道頓堀の竹田芝居で興行の時に外題を「明鳥六花曙」とした。これが今日行はれる外題である。詞章は新内の明鳥を取り入れてある點もあるが、大分義太夫式に改められて筋も複雑になつて居る事は本文を讀めば分る。

一座敷も静かなる。地 雪はまだ。残りすれども。今に於て手がゝりもなく。
て寒き春の風。吹き晴れぬ身の浦里が。浦里に迄憂き苦勞。とても生きては居
スエカヽリ 湯上り姿その儘に。禿の縫打かづらられぬ身。せめて縫が頬なりとも。餘よレ申し。調時様が屏の外に。來て居さ
連れて。上る二階のフシ部屋の内。地 所ながら暇あひ。ア、思ひ廻せば廻す
それと縫が煙草盆。長地カヽリ 煙に疊さ程。これ迄切りし甲斐あいもなし。通ひ走りかゝつて高欄に。手をかけながら
は晴らしても晴れぬ思ひの時次郎。廊に咲く花の色香も深く馴染めし。浦伸上り。調ナウ時様。よう逢ひに來て
文細 誰が戀人と夕間暮れ。せかれて今里にまで今は早や逢ふ事さへも儘なら
は山名屋の。浦里にさへ恨めしく人目。ね。浮世の中の有様かと。ステ身の成
の關を忍ぶ身の。雪の夜道を迷ひ來て。果ての悔み言。地 それとも知らずナウ
の外面に。フシしよんぱり。と。調縫。調そなたに渡した昨日の文。見附
ア、浮世の中とは言ひながら。水の流けられぬ様に。持つて往てたもつたか。どうした因果でこの様に。堰せききにせかれと人の行末。先達せきだつて御主人の重寶。ソリヤ氣遣ひござんせぬ。時次郎様
臥龍梅の一軸。紛失ふんしつしたる我が通り。に。直に渡しました。ア、コレ聲が高
地 それ故に勘當受け。忍び／＼に詮議い。もそつと靜に言やいなう。アイ。
み／＼となつかしく人目の關の夜着の

中明けて悔しき。髪の髪ついとき上ぐ延を丸めて屏の外投げやる知らせに時やて。其まあ登のばらつき様。つい
る櫛の齒も。言ひ度い事の數々も今は次郎。様子あらんと用水のフシ陰に隠ちよつと櫛入れたら。お前の心の縫れ
言はれぬ二人が中。懸しい人を振捨てれて忍び居る。部屋の戸明けて髪詰。モウさつぱりと氣も晴れさうな事
て一人。ぬる夜の手枕も。彼の邯鄲のお辰。それと見ると見よりオ、花瓶え。調ちやぞえ。オ、お辰様の言はん事わ
枕なら。夢になりともせめてまあ。添さぞ待遠にござんせう。最前から氣がいの。たとへ縋れる氣が晴れても。斯
臥す事もあれかしとわしや。幻に見よせて。早う來たいと思ふ程意地の悪う結び目が弛んでは。ついばら／＼に
うとて惚れはせぬものあぢきなやと。い今日はたんと仕事もつかへ。又あつならうかと。それが悲しい。ホヽヽヽ
我が身をとんと高欄にもたれかゝりしちこつちの部屋々々から。呼びに参じホ氣にかゝるわいな。サア其氣にかゝ
立姿。柳の枝に春雨の風吹き添ゆる。であるけれど。そこ／＼にして抜ける結び目を。しやんと留めるが私が手
フシ风情なり。地男は漸う涙を抑へ。來やんした。しかし花魁。お前はきつの内。マア鏡臺に地と無理やりに。フシ
謂いつ迄斯うして居たとても。限りもう濟まぬ顔。そして目元もうるみ。ど勧められても。タヽキ進みかね向ふ鏡は
なき五の中。長居する程そなたの身づこぞ悪うござんすかえ。コレ綠。ひと疊ねど空る。お望みの海山に。茂
まり。とは言ひながらその綠。親と氣をつけて。藥でも上げやいなう。アリてつらき憂き涙。流れの身には猶積
もえ言はず親方の口顔を忍び子心に。イ最前から。さう思うて居さんすけれど。藥はいやぢやと言ひやんす。オ、
も。さぞや恨みん不便やと。くどき歎ど。藥はいやぢやと言ひやんす。オ、に出づる。色目を緑が汲取る!達ひ。そ
けば二階には緑を膝に引寄せて。はつ緑の言やる通り。ちと氣分も悪けれど。らさぬ顔で吸付くる。フシ煙草の煙空
とばかりに取亂し。フシ又も涙にむせ藥飲むのも厭になり。櫛入れるのもきに吹く。お辰もさすが物馴れし。世
びける。折から來かゝる足音にはつづつ好まぬ程に。お辰様。今日はまあ間疎を取交せて。詞イヤ申しあいらん。
と驚き立上る。氣轉きかして禿の綠。止めにしやんしよわいな。オ、さうぢモウ世間の事と言ふものは。其身にな

らねば知れぬもの。わしも昔を思ひ出 いつの程。状の取りやり澤山に。紙屑 長い命を短うする事。わしが身に覺え せば。まんざら斯うでもなかつたが。 が一杯詰つた揚句には。心中に出よう がある。殊に又その内此縁といふ様な。 斯う言へばをかしい話する様なれど。 と乗が來た所。常から中よい友達が留 可愛らしい子でもあると。無分別は出 どうした事やら常々から。お前の事が めてくれたが幸ひとなつて。今では女 されぬく。義理といふのも。可愛と 気にかかり。イヤサ。お前に聞いて貰 夫が氣安う暮す。モウ斯うなると榮耀 言ふのも。命あつての事いな。オ、是 ひ度いと思うて居た話。マア一寸聞い の八百。モウ一寸氣に入らぬ事がある はしたり。つい話に身が入つて。碧直 て下んせ。アノわしがやうな見つとむ と。ヤイ出て失せい隙やるわ。とモウ憎 可愛らしい子でもあると。無分別は出 ない女子でも。譬にいふ鬼も十八とや てらしい。愛想もこそも盡果てる。千年 気さくな意見浦里が。目には泣かねど らで。どないか思うてくれたが。今の の戀も覺める。とよう言うた事ちや。と 心には。満つる涙の増鏡 フシ月も哀れ 主ちやわいな。ホ、ヽヽ。モウ色々と サ思ふも年の功だけぢやわいな。オ、 と憂るらん。地縁もなく、櫛箱を。 口説かれ。マア／＼今のが済んだと お辰様とした事が。わし等が様な勤め 思はんせ。サア深うなつてきて。モウの身で。可愛と思ふ人もなし。思うて 取片付けばお辰も共に。汲取り汲立上 思はんせ。サア深うなつてきて。モウの身で。可愛と思ふ人もなし。思うて り。調子下り／＼。是から向ひの東屋へ 何の事はない。指切り鎌切りといふ様 くれるお客様。亦廣い世界にないもの 往て參ぜ。花魁さらば。と地言ひつ になると。コリヤ友達に斯うした事で ちやわいな。サア／＼そこちやわ つも。おりる梯子を廻り縁そつと切戸 金が入る。二歩貸せ。三歩貸せ。サア いな。さうは言ふものゝ花魁も。今が を明けて出る。お辰は二階を振返り。 しまつた。コリヤ小遣ひの錢箱にしら 繼盛り。毎夜々々のお客にも。深い可 調コレ綠。勝手へ廻ると隙が入る。此 れたわい。と思うたれど。サア迷うた 愛。モウ命もやり度いと言ふやうな主 切戸から向ひへ行く程に。部屋でナソ が因果。エ、儘よ。若い時は二度はな が出来ると。サア何が親方は壞く。逢 レ。しつぱりと締めてたもと。地小陰 い。と仕面工面して。どうと小袖簞笥も はれはせず。せうことなしに突詰めて。に忍ぶ時次郎を。無理に押しやる切戸

口。ぱつたり閉めてさあらぬ顔。傘ぶり 気強い男とばかりにて。身を震はして。る足音浦里が。胸に轟き時次郎を。無
 かたげ 小提灯。フシさてお辰は急ぎ行 泣き居たる フシ心ぞ。思ひやられけり。理に炬燵へ忍ばすれば。緑は機轉有合
 く。地人的情にに入れられ。時次郎は 地折から遣手の聲として。浦里様 はす。フシ夜着打着せて立退けば。地
 段梯子としや遅しと駆入り。走り寄つて浦里が。手に手を取つてしめ泣きに
 エテ只むせびに入るばかりなり。地涙な
 がらに時次郎。 調何時まで口説き歎い
 ても。返ぬ今の我が身の不運。地と
 ても生きては居られぬ此身。そなたも
 共にと言ひ度いが。 調其一人一緒に死
 すならば。跡で。可愛やこの緑は。どう
 なるものぞ不便やな。今死ぬる身を永
 らへて。我が亡き跡で一遍の。回向を
 賴む浦里と。聞く程せきくる涙ながら。
 ソリヤあんまりぢや情ない。今宵別れ
 てわしが身や。可愛緑は何とならうと
 思はんす。死なねばならぬ覺悟なら。
 三途の川もコレ。この様に親子手を取
 やつと下りて下んせ。はやう〜と地
 ことが仰山な。何の用でござんすえ。
 り諸共と。なぜに言うては下さんせぬ。せはしなく。わめきながらも段梯子上
 エ、何の用。何の用とはしら〜し



浦里折檻の場

い。サアお前にちよつと用がある。且ぬる用事といふは外でもない。わり必ず恨んで下んすな。日頃のことは扱那様が呼んで來いと言はんした。綠もや時次郎といふ毛二ために。何ぞ頼ま置いて。最前も且那様にわつ口説い一緒に。きり／＼ごんせ地と引立てられた事がサあらうがな。有様に話して。詫言してもお聞入れ遊ばさぬ。白れ。長地何といらへも浦里が心を残す聞かせ。と地間はれてはつと浦里が。状さんすりや其通り。痛い口せぬ中。炬燧より。胸の動悸のやるせなく。禿驟く胸をフシ撫でおろし。詞且那様サ言はんせ。地と囁付く如く罵るおかの諸共に。呵責の鬼に追つ立てらのお詞なれど。私や誰にも頼まれた。や。何といらへも泣入る浦里。エ、しれ。オクリしをか、り／＼立つて行くあと覚えは更々ござんせぬわいな。フンとぶといと振上ぐる。等持つ手に取縋る。から。あたりを睨むかやが目の光り輝く。奥座敷引立て。こそ三里行く空く。コリヤおかや。最前言附けた通と打叩く。叩き立てられ浦里が髪も形の。哉辨闇はあやなき浦里が。ふさがる。り。庭の立木にくゝ上げ。白状させも取亂す雪の。肌にいと猶。見るに胸の變き思ひ。タ、キ足もしどろに震はよ。地と銳き詞。アツとおかやが立寄つ悲しさ稚氣に。主の方を伏拜み。おかれて。冷たさ怖さ禿の綠。木籠にひぐくて。泣入る浦里引起し上帝とて繩りやが裾に取付いて。もう堪忍なされて駒下駄の音も。するどき綠先の。障子上げ。雪持つ松の荒皮も。フシ喰入るば上げまして。下さりませと歎く綠を引明ければ主の勘兵衛。白髮交りの頑丈かりくゝり付け。庭に有合ふ竹等の紐引きほどき後手に縛り付ける有フシその顔色。地見るに二人ははつとえ。有様に白状さんせ。アノ餓鬼の様様を。見るに不便と時次郎。もう是迄ばかり。氣も魂も消入る思ひ。胸おしなつて居る時次郎めに心中立て。意と高欄より。飛んで下りんとする處。しづめ縁がはに。手をつかゆればじ見しても抜け歩き。其お報いが來たの浦里日早く。詞アヽ。コレ今こな様がるりと見て。詞コリヤ浦里。そちに尋もコレ。わしが業ではござんせぬぞえ。出やしやんして。イヤサ今こな様が縛

らんした縁は可愛。サア可愛と思うてい。ア、聞けば時次郎めと汝が中の。打据ゑらるゝ悲しさは。此世からなる居さんしよけれど。おかや様はお主の眞實の子といふ事は知れてある。サア 八寒地獄 大焦熱の苦しみに息も。絶前。ナサア夫ぢやによつて悪いく 緑め。その時次郎はどこに居る。それえぐゝ絶入る縁。逃げんとされど締めく。地と口の中で知らすを悟る時次 からぬかせ。イヤ知りませぬ。アコレ からむ。か弱き背中厭ひなく強氣の郎。出るに出られぬ此場の時宜。かゝ申し。縁が何の知りませう。ア、イヤ 勘兵衛引摺み。はつしくと打据ゆれ歎きも我故とスエテ 清園に喰付泣きく。お前が傍に居ながら。縁が知らば。惜しや色増す若縁アツト一聲倒れ居たる。地物をも言はず主の勘兵衛。ぬとは言はさぬぞえ。オ、それく。伏す。さしもの勘兵衛フシ呆れ果てにが鐵橋提げ庭の面。泣沈みたる浦里が。サア白状しをれ。共と言ひつゝはつたり。切つて座に直れば。浦里重き顔を鬚摺んで聲荒らげ。詞ヤア斯様に嚴しと打据られ。ア、術ないわいなう。上げ。誰を恨みん身の罪科。懲故今く折檻するも。おのれが心に覚えがあサア苦しくばぬかせ。イヤ知らぬ。こうき苦痛。わが身一つはいとはねど何らう。最前裏の切戸から。忍び込んだレ申し花魁 誓言して下され。死んだらにも知らぬ此縁。かゝる憂日を見せる時次郎。この勘兵衛が預り置いたるもう逢はね父様。共逢ひたい見たいのも皆わしから起つた事。堪忍してた金岡が一軸。詮議などとは片腹よれる。と子心に。親を慕ふ心根を。傍で見るもこらへてたも。子供心に聞分けて。コリヤ。あれを見よ。床にかけしは金 日の浦里より。こなたの二階に時次郎。親は日先にありながら陽氣浮氣の酒事岡が一軸。指さす事もいつかな叶はぬ。オ、道理ぢや。是にと口の内。聲をもに所體くづして殿御の事。逢ひたい見サア浦里。わりや時次郎に賴まれしに立てず喰ひしばる。とは知らず主の勘たいとしどもなき母を待つたがそなた相違ない。サア左様な事頼まれし。覺え 兵衛。詞ア、何をいふやうに。思ひ知らさん。き契りぢやと。前後もさらに辨へす。はござりませぬわいな。エ、しぶといぬ。サア小びつちよめ。思ひ知らさん。き契りぢやと。前後もさらに辨へす。女郎め。とてもおのれでは吐し居るま や是くらへ。地と鐵橋振上げ續け打ち。庭に喰付伏轉び流す涙は春雨に。雪

解け フシ亂すばかりなり。浦欠伸ませ どうぞお任せ下さらば。ハイ／＼ 又おれ次第ぢやがな。ヤコレお浦。そ
りにおかやは立寄り。調子モしぶとい 有難い仕合せ。浦といふに主は打ちう 様さへム、と言や。コレこの手代が。
子やなう。とても白狀せぬからは。おなづき。詞ム、外の者なら赦さねども。ノソレ深き心のありそ海ぢやモウ
のれも次手に冥途の供。と 浦又も等を 詣しの内は彦六。おかやそちら二人に く女房の様に。新内思
振上ぐる。折から來かゝる手代彦六。預け置く。きつと白狀致させよ。その ない。エなどとへへへ＼＼。コレ
此體見るよりコリヤどうぢやと走り寄 間に我は休息せん。と 浦おのが仕業の く彦六様。且那に請合ひながら。白狀
つて引退くれば。おかやはむつとしニ 罪科も。後日の難は兩人に譲る心の奥 ささうとはしもせいで。浦里さへ見り
レ彦様。詞お前はマア何で浦里が。肩の間の フシ襷押明け入りにけり。跡 やべた／＼と見苦しい。わしが心の思
を持ちに出やしやんした。へ、無駭な 見送つて彦六が。浦里が傍にちよつつ ひのだけ。堪能ささうとはしもせいで。
がらこの手代。貴様たちに用はない。く還ひ。詞コレ今旦那が何と言うたえ。あた面憎い。お前に任して置いたらば。
すつとそちらへ寄つて居や／＼といふ 外の者なら赦さねども。嘗しの内は彦 この白狀は得さすまい。ドレわしが代
に。へへへ＼＼。憚りながら此手代が。六。その方に預け置く。何とどうぢや ろと 浦立寄るを。取つて突退け 語どつ
旦那へ一寸お願ひがござります。エ、えらい者ぢやあらうがの。ぢやに依つ こいさうはならぬわい。ガ又貴様のい
何でござりますわい。ム、アノ可愛らて。常々からおれがいふ様にさへすり ふ事ぢやが。その御面相とした事が。
しい。アノ浦里ではないアノ縁。また や。此様な痛い目に合はすまいに。イヤ 悉皆宣徳の向ふ獅子見るやうな面をし
浦里は常々から私が。アイヤ常々から又。おれが素振を見て。わが身とおれ て。この彦様に惚れたとは。且那の手
氣質はよい者でござります。ハイそことの疑ひもあるぢやある。コレ腹立ち 前も面目ないわい。それよりマア浦里
を見込んでこの彦六が。アイヤ折檻は やんなや。爰が辛抱ぢやわいの。廓に が。縛から解いてやろ。と 浦後へ廻る
手代の役。白狀は私が致させます。ある中ぢやがな大事ないがな。こゝは をおかやが取つて突退くれば。等追つ

